

三張未のり紙 完



相中略之庵纂輯

其寺所記 完

東都 銀塘下一湖堂壽櫻

圓位上人乃双忌題花

明和五歲龍集戊子仲春新鐫

柳居先師の单忌歌



圓位上人双忌影前香語 二目整

人のちんねをたふしてさひ出されしもの
がしんを人のちんねをさへしもの
地と陽も去るものこの葉は永劫はえん
世より繁

とくお祈りくそ花の陰して家志をむの風
今古海内を流るる花の影をさへしもの
ゆゑ其もあはれみの双忌の影あはれ
子語の一句とあはれをさへしもの

表八章

陰顔ふふふ慕ふ花供養

多醉

杖を飾るまじき

眼唇

玄鳥をみまがしぬ猿一泥くま

多路

持儘く馬を牛の車くゆる

丹人

川留と敷街道もすくらはぬ

朱帘

ぬく川と音農句牡丹餅

茶室

二日く名を何く免て月の珠

風日

袖先へ出まはる川を流す次

春江

念ノ一

湘中 河西

松洞庵

くせのけきじうの糸お花出糸

多語

破く簾と綴糸糸遊子

多味

ふ喉ひらくはは結尻の鷹若く

多明

卒すくく見ても糸を一艘

多津

別まじくは瓜名由と管うら

多津

鞠の四もくを別と秋と

多明

表六章

石工乃り川切出して初摺

多明

炭焼ぬふ平煙る糸糸出り

多味

佳夕亭
尺布

山人千回又千上河梁出々物

六月暮る酒乃石子陽を

八棟の掛りぬり也千去るまて

叱るる千も道りもなかり

川留り浅瀬と舟と細くなり

秋の志々舟も遠山の鹿

み嘉六子

下り半道と雲井お山橋

旅人き七重乃猿おハる所々

玉芝

吹雲

一
二
三

玉芝

吹雲

花ノ二

湘翠樓

洞秋

片一竿一庭又深く椿う形

青きを端も廣以外全委

ゆく雲をさ川の時を風中とあて

手と物と舟と馴れ物尻

虫百と付子敷と都なり

任仕習ふ金身文さぬ

明月子雀も夜を去遠く人

相場の飛布露と煙付く

み嘉八子

儿橋

負味

巨醉

節五

栢舟

林舎

心城

剛力なりたてて初くあくか
瓜音乃共一とまふお花乃あ
荒れのものも架り浴を極か
初額と上は並り字花の雲
一本うら山乃封切不出る如
是く浦に隣の出もある極か
鶴乃遊むは庭の秋甚うか
負秋
川橋
巨醉
帘又
林舎
栢舟
心城

列史電

梅明

浮埃不中は森如くおまの山
夕管告りも棠一戻るる
玉珂

龍ノ三

炉ぬき乃跡を帚をきりま
走も来るや返半に浦く
伐出—と藪に堀乃秋—き
高賣りもふりて是馬工多し由一
大勢う舞の仲間お中一日乃月
空宵も待てと露乃吹る
深草をぬき鶴とゆや
あの一—
お百負一煩
梅儼
雨桂
其多
玉珂

低く見ふおもはせ給へくはるる
 ち川もや空を離ましくはの宵より
 子本と搜しつる糸布さくら
 みる所乃空を撓て櫻の
 障下もの糸を拵しぬらうか
 きのおよも雲のけしきや散らうか
 きののら乃七日を曇る梅の如
 峰つちを眺こよむおはるる

夜半きくは馬や花乃あ
 吉次 風日

花ノ四

先達のたらくし時や花はう糸
 けり雲よりや糸糸糸中あはるる
 花のゆ相しぬもくお小袖幕
 雲のき河原 教りつ梅のさ
 雲の戸の歌もいなりと赤梅
 多んややまうはるくは梅の
 何れもまうまうはるくは梅の花
 けり雲よりや糸糸糸中あはるる
 一三梅咲くも梅のいさみか
 子雲の相場よりう梅のう

糸石 新上 松波 田村 叶病 春雪 再花 音桂 素笥 素庵 素林 須賀 吉波

えふ人乃くしそをうめあはる程
曙や人と部と暮し乃くし
じ光あやせ禅乃教を向む
膝くやとのいりもあ花の影
しら言やうら珠数もふの氣
ゆき世をいりぬ人なげのけ
し〜おびうらも満るふの氣

虫久保

小田原

大磯

松子
麦由
白河

丹人

朱帘

紫雪

雪路

河東

積雲樓

冬秋

尼寺に費ふ金にやあなづ

意とあ聲の憚う思猫

春城

七ノ五

鳥羽玉の夜にむの侍くあま

戸葉

探りかきも歌とらり

百鳥

河を影のゆき出る暮志月

五東

北東北に暮しか鶴頭乃り

梅友

お喜六ま子

山鳥の奥をわらわれあうが

長城

まけあき遠雪と河の原友乃

雨東

じ光うきや侍まの袖とあて

梅友

けうあしぬくも文とあし初

百鳥

田子てんく僧とあま子あうが

戸葉

手たたし乃の為を老を思を依を久を所をか
ゆゆ一一笑を也也折を子を遠をくくてて近をきをととの
梅をうをまをやを船をるを川をくを也をとと船をてを半を
舟をくをとと梢をくを川ををを出をらをくをか
連をさをらをうを雲をのを隔をさをらをくを那を
常を目ををを居を一をてを清をきをあをらをくをか
常を盤を木をとと雲をがをさをらをうを山を梅を

戸塚

鶉父

長江

斤重

馬橋

洞曉

鎌倉
尾風

又魚

孤栢亭

子來

元ノ六

朝あ日ひ子こ海うをを人をくを死をしをらを
少すくくとといいるを出をるを船をのを篠を舞をあをらをくを
洗を濯を石を乃を乾をくを宵をもをさをまをきを
子こ福ふ者者ののまをととせをりをきを目をのの秋あ
捨をるをもも栗を乃を菘をををあをらをくをらをんを
浦をくをひを子を温をををえをいをまをらをくをらをんを
借をくをとと浦ををを依を羅をととをを無を
馴を深をくをハを惟を光をのの名をとと河ををを賣を
ここりをくを敵をのの廉を相を殺をせをらをんを
拿を松をののまをしをらをくをもも松を乃を時を

二箇

竹路

少雪

秀石

尚船

巴橋

麻之

巨蓮

鷺光

白羊

響り遠き音もは七の夕ぐさ

と紫

六二六そ尾

伐木を杓う響く櫛か
 響くをひく鐘見の流きおゆ櫛
 舟の音と舟歌あくら舟
 旅人の通るはむお糸櫻
 花の香もに花をたぬぬ敷隣
 遠く舟の音も何よりあはらうか
 七堂を降くはめらう花出う字
 ひとり舟と笛吹く音も花の山
 白羊
 二酉
 病乞
 巴橋
 三蓮
 山雪
 竹路
 宙船

花ノ七

猿渡子歌を一首お花出う紫
 日と花をふとく紫の下に花う舟
 酒の色出まう紫お下櫛
 麻之
 秀石
 と紫

武彦

八王了

楓の亭

書橋子

山を引く人の葉をさふ出うか
 阿も不の空を海とめを櫛か
 花あうとくぬ堂をさうらう紫
 閑守の目をあう一をり初櫛
 四 五日を夜ぬきぬ紫をたう字
 あくんも八大き寺や山櫻
 星布
 楚江
 以竹
 山雪
 山雪

秋久

山雪

山雪

獨辨を啄む人やは乃後

代節

真生

雲をさかす花もさかすもさかす

箕田

文御

く河のさかす谷やさかす

栗橋

和誰

歳賣の時さかすお挑のさかす

素人

曇るは雲さかすさかす

程大谷

水泉

出くもやお富士さかすさかす

松橋

下總

市石菴

舟船

とくさ一度さかす本やお

空解のさかすのさかす

市道

岩りさかすの風さかす

舟船

花ハ

節く尾籠さかす

信朝

切さかす乃さかす

仙臺

中流さかす

之文

芥て退く田子湖乃目をさかす

百井

風をさかす

千路

お喜ハ

酒樽のさかす

市道

雲さかす

舟船

経冊の讀め家何架やお

舟船

本のさかす

仙臺

雲を根子塔の高きおあわら
 山道のわらわらひきえんこわら
 山子人子之つらつらふや初櫻
 必子指惣七日の行や花の山
 梅咲やわらわの解きこ人通
 入相の鐘とつらわら梅
 木危と夜見定こわら梅
 奥山子部のわらわらわらわら
 上總

花ノ九

之文

百井

子路

其風

誰笛

乞石

徐并

吉友

光緒

木のこころやわらわらわら櫻の形
 月乃懸つ子金農旅
 春ぬきの田螺を吞る趣向
 細工の妙き阿婆と嫌ひな
 手自傍の使者と隣(書き並く)
 雪の根世も堆き乃
 六表六幸

四時亭

西林

巨梅

林鳥

林

梅

鳥

花あうり日暮びき子文く見ら
 風いそぬ寺と見しうら花盛
 竹の戸のくき世(出らわらわらわら)

林鳥

主梅

茶の内
有隣

風白く度よりありあけゆく程に
 岫と出く節ぬやや山あくる
 花のさきさきとあけゆく程に
 山寺の蕭の音あけゆく程に
 山吹や朝日のまはりあけゆく程に
 上忍 留田 鹿角庵 春路
 陵を雲の下ざりし山依久程
 春の要うらむと願ふの何き不の
 麦泉

花ノヤ

今びつ後とあけゆく程に
 細字かきとあけゆく程に
 遠城のみきとあけゆく程に
 洲の松のうきとあけゆく程に
 六喜六喜
 大川とあけゆく程に
 見たりあけゆく程に
 山とあけゆく程に
 い川のあけゆく程に
 今とあけゆく程に
 巴陵 梅志 如布 麦泉 香孝 如布 巴陵

ふゆの言根もくもく流るるが
くき雲のさきくつら流るる梅の言
録の舞ふ舞ふのまや花のり
みよし舞を舞の勝やまありあき
一日を一本と名づく依九良か
ち河をや流はくあき友をくあ
幸の来る時を流る初櫻

高崎

谷の川花子地るるあくく
一二輪際く見えはくく梅

如舟
上白井
十二
澤維
成重
馬次
白井吹屋
多路
民歌

苗西
流宿

何てふ言たもく流るるあくく
松子目と休、ま花のりく脚あ
冬子仙の山のまやまありあ
心嫌ひとまの流るる梅の言
晴る日る梅はけりあくく
昔こよひも梅とまをまの山
来る人の数とまを初梅
去るく見しての木のあくく
月のあくくを流るる花の
くくを流るるあくく

里松
一友
山言
又言
鼻水
賀水
勇之
如秋
崔路
里錦

朝夕の陸中がわくわく 見ゆら
そぞろくを見てもゆきく櫻が

みんそ電連

曇りぬのききうら 蒼い色ぬら
道と向ふ人と待りおまぬら

信丸

油割しと蝶を交まらぬら
初櫻と朝を撞撞あまぬら
花ちりし市へ伐ぬら
けらぬら一敷あまぬら

巻ノ十二

桂井

西什

手換

芳山

夫代

洛因

中世

手調

路一

他

指山

標ちぬ木の子白 梅乃花

松代

楚川

雲子白む危き林し 少梅

戸倉

紫雨

下脚

日光山

磯山お浪をくもやふ危ぬら

杖隠

七日見ふ雲の峰 阿まぬら

把業

常陸

常陸原

毛織の隣はききぬら

菅人

雲一あくくしきき山

夜柱

人きききも古曾おまの鼻

落町

奥列

一 敷き肩子雲何索急とく
為並ぬ佛を伸子出くか
馬志 確花

紀列

月七日也 濁ふ山ざり花出り
日高 眠石

伊勢

鷺の来く宿く於森やま月橋
松坂一葉電 吳扇

高乃 裾を踏於 晝鐘
急例

時徳分所代子田おの連立て
陰波

拾ふくものつよぬ 高札
莫如

一六を昔はりの市く何分
二

ふん

垣外を破めて横子出る
一
月新を安く青屋のりく守
四
澄くきくえく曲突く是事
三

右喜八幸

一 節を曲くこの時や山出り
倉波
況 登くし雲子伊達有り山佐く
英如
素人らく酒屋七か多山橋
急例
雨く平隈よりき出くあくか
久居 文橋
人音も多くむりざり初橋
君山

肥前

僧じより富士見る水の花の信

古崎 観牛

大坂

梅原や白ひも言きまこと何

榮坡

松皮津の藤も言津のま所

石嶮

冬も凍る木くも明し一花の山

如立

西部

遊ふ日乃空あつり花あう

百卉

西も雪の東も雪のあもあう

比権

東部

行舟はる山のあやま川橋

柳絲

糸十四

何ふくも家も一木あう

輒船

風呂敷に捨る世に海に橋う水

柳急

夕の雪を保し山の花あう

菊道

茶の心やのをいふものハ蝶をう

し河

山ゆき乃根をいふ何ふく

柳羽

釣法を雲のうへへて花あう

菊庄

く何く平夕雪をいふ一花盛

泉之

く聲くち花深きり花あう

羽橋

傘持の科に雪のあう

芝明

春も雪のあう人花あう

禮水

くわんくわん 峯を越へり 雲あり
静る花や又くも 色少あり 車
登りた 花をさき 山あり

松架竜連

梅咲や風可くも 縄すべし
雪よ似ての 極溜く 花の山
降るもの 空知く 何れも 山
根に 重く 雲を 節に 花の山
去り 去り 梢に 花の あり あり
九重よ 似て 雲の 山

大来 深谷 岷重 風志子 古齋 楠水 関月 松谷 籟之 花ノ十五

花と又人も 群れ けり 白ひりり
山人の 啼を さく 花 出く あり
鉄砲の 音を 聞き あり 山 依久良
外の 木の 夜に けり 花見 あり

花内之春

この佳系をたのむや 花あり

花の 地を 又く あり あり
磯色の 花を あり あり

萬東

志あふあ子木のうまきと柳一馬

西月

さびしぬ楓を林下や志あふらう

昨馬

七日ワ比叡子時中あふらう

松架菴

案馬

夢の糸る急の骨らり飛あう

四井庵

字石

下りて来し人物りあふ山楓

七龍菴

百明

志あふ子のあうらり柳架飛あう

松露菴

馬明

花ノ十六

柳居先師位下復忌香語

二月晦

晴之七電

言子保し卯登りひの五日りう架

柳居先師位下復忌香語

はりあふあ子のあうらり柳架飛あう

八百里の多摩川を流るる柳架飛あう

先師技光とあふらう

位下まが、言子保し卯登りひの五日りう架

準繩 意なる外草忌のふゆわその方洋をたもみ

りあふあ雲菴の

秋のあふらう

六十一 後波の

歩使るるはとめてくふき晴る川次と云はれりて

おとのさぶらばのみのめをあらんむ

晴る川 澤の長のちけの 高主

生雲のうらぶらと云はれしを 藤原の
志の 無き人幸ありて 西行 忌をたれり
題 柳先作の草忌と云はれし 諸邦
執友の句をうらむの 一葉をあらひしに
師恩をうらむるを 友士と云はれし 源光の 渾き
の 一章をたれり 友と云はれし

雲子入もや耳も辨るるをた聲 風林

お糸極氏雅君

る一

くく寸の初音の竹を撓るる 舌語

千綱子のゆき跡なきに 光明

中子倦くして 足

雲の舞 尺布

くく雲の 吹雲

くく雲の 玉芝

あき雲の中を 洞秋

雲の聲の 女 橋

月の弓は 負條

帆子影を入る 巨醉

八棟成都の河をよみけり光が
 しく花すや哉日よ刺し一羽保せ
 海へ向く家々の礎をよみか
 しのきこけしとこきときし声
 出る金よぬま婦よとまじり終子の聲
 やりしや年をよみしとて麻を産
 物陰にゆきぬくく影にまじりか
 影にみおと急を浮きぬひまらか
 時とより脚中よ衣まきしきし声
 けりしとよきとよきとよきとよきと
 梅像 児明

二
 二

燕やゆきし一羽時相はくし
 因西き地すてし流るる音にり
 けりしや羽を居る能く浪の縁
 軒借しとて延きよとてかきまらか
 空より別とよきとよきとよきと
 香の葉乃仕りしとて一ツ
 下ハ己し御神初めとてし声
 花よ来てし歌よとてや朝中しき
 大空よと聲とてしとてし声
 下りよとて羽を仕りしとてし声
 来之 布吉 雨椿 梅明 辰日 糸石 松波 新 草席 鳥雲 再花

口の仲の陽を兼多きくはれ
 地一降りかゝ見えもあはれ
 何れもまことあつきのあつきの
 けいけいやくやくやくやくやく
 終子あやあやあやあやあや
 聲はく果てなきうらななき
 ときよきよきよきよきよきよ
 古雲を流るる流るる流るる
 何の度いなきまじりぬも
 夫ののなきうらななきうらな

女
 白河
 素竹
 素笛
 素色
 素波
 松子
 麦由
 丹人
 朱常

三

見たりち平富士を外うじりり
 春そりり年をまじりぬも
 かろゆ——ゆゆゆゆゆゆゆ
 舞時を雲を割るる割るる
 去るるお家も浪の羽はら
 字もまじりぬも見えぬも
 しく飛すや寝るるもあはれ
 鶯や朝日たつてく像の縁
 木のこまじりぬもあはれ
 けいけいやくやくやくやくやく

紫雲
 春路
 春休
 長塘
 西東
 梅友
 百鳥
 戸葉
 鶯文
 春江

飛乃を金乃共はつる雲雀か
 去鳥や終の電々えるいづくし
 谷底へくもくくひりおきれこ
 四五所乃目々えきりく燕の形
 空をよみ雲の陽あけじりか
 けいらくお馴染の朝の雲乃き
 追出ーと馬と追ふやきく此声
 きより柳花をこなく終に聲
 途くの明とりの道しぬえをか
 風の子の陸へ通りおしをうね

尺雪
 馬橋
 同曉
 尾庵
 文急
 子来
 白羊
 二酉
 路元
 巴橋

ろ、四

ひ雲の宵に遊子雲雀う那
 去るや羽の電々える所まき
 共々目のさめぬ朝出や鳴を雀
 横子お入羽とくくぬじりりか
 舞じりり教生る乃空を平居
 しくひすの初音を谷へくく
 空を平居呼出さきしう紫の代
 何を本の、柳より早き雲雀外
 けり原や田舎の鳴き一と楚の
 雲のまきく聲を陽もぬをたけ

巨蓮
 少言
 夕路
 南船
 麻之
 与紫
 書橋子
 星布
 楚の
 以竹

去るや聲も翅もとの相ひ
 しくひや釣一まゝし日の目
 棧乃左右平ゆやきしれよ
 神柳平相やうすふまをり
 去鳥や性平と象のくら長
 野等描の乃をゆひきれり
 階子田の飛平ゆびりか
 常やゆきゆゆゆゆゆゆ
 湖のやう〜観くじりり分
 波う〜ゆ橋と掃や〜性〜

山童
 山童
 急生
 又卿
 和誰
 素人
 泉
 橋
 希松
 市道

ちよ上

去道一宿も虹や歸る一
 しくひまやまの釣籠と待せり
 跡う〜も日とゆぬき〜を花い
 常や救と朝とと端〜う〜
 采摺の杵の宵路を去るや
 けり何〜ゆ〜人〜撓〜蕙〜邪
 常や尖るゆ〜れ吉
 常や乳母の朝寝と呼吸〜
 立浪の繪の宵〜遠〜蕙〜
 常や釣目とり〜救の中

希松
 徐丹
 危石
 其風
 子孫
 百井
 之文
 仙童
 朝
 孤

日の暈乃身を眩一と夕雲雀が
鶯や星輝る夜乃何さほしき
庭のる日乃野末を遠くはれ
くくひ来や遊こゆゆの柳を又
くく形落やわらう路のいさかき
鶯やと朝を陽一貫一とや
くくひ寸やとねき下敷に紙を
鶯や聲を付えぬ藪の中
宇丸飛寸やゆゆのいもぬ藪の鼻
きーれ聲跡寺の枝よりせりり

糸糸
正林
林香
之梅
方塘
山雨
山曉
危園
玄魚
止嶮

三六

鶯やわらつ仲あめの朝日ゆき
沉こふとくきあり風の去るが
駒やや皆けし何さ敷子啼
鶯や日向きつたて谷のり
付くくやむいづのいづれを
鶯やや丸く飛石を踏たれえ
くくひ寸や初音子のきく朝おしき
宇丸飛来やの簾をとまる緋の袴
くくひ寸や朝日呼こび竹の奥
鶯やや耳のり朝をぬりしき

徂行
至涼
春路
麦秋
馬若
梅志
如布
巴陵
如舟
ト二

夢や目よき毎の思はるべき
くくひすや谷中時をたぬの音
降雲の聲は船の音に似たりか
物尸平野を離るるまをた
はららぬ夜度までいささうつり
夢をよみて思ふよき啼て出た
あせしむる鐘の音に似たりか
きく声は船の音に似たりか
大虫の果をこぼれしりりり
夢やや聲を握りて去る

作雅 醉雪 馬丈 魯路 民前 芳山 西什 苗雨 流宿 笠松

きく

あせしむる鐘の音に似たりか
きく声は船の音に似たりか
大虫の果をこぼれしりりり
きく声は船の音に似たりか
目のあはの聲は空見の音に似たりか
鶯も朝もよけてしりりり
現しる宿を定るまをた
あせしむる鐘の音に似たりか
きく声は船の音に似たりか
花をよみて思ふよき啼て出た

一友 山鳥 文鳥 草鳥 買鳥 曾之 如枚 荏語 星輝 鞋井

雨さしき早も化る森重産
 ありし中らりきまゝか
 橋枕も片も霜かこもか
 古思を投く返出もか
 きーの片まの葉山を瘦か
 学もや四物さき笛さか
 名の葉もや何さか
 夕のめり純結りか
 くくひすや算ぬものも
 風の外さか

雪一

冬
 路一
 指山
 楚川
 葉山
 路周
 片人
 夜柱
 馬足
 確意

冬一八

野もさき山に動もか
 くくひすや初音をあか
 学もや葉結りか
 くくひすや初音をあか
 きーの片まの葉山を瘦か
 学もや四物さき笛さか
 名の葉もや何さか
 夕のめり純結りか
 くくひすや算ぬものも
 風の外さか

眠石
 異解
 陰波
 英如
 冬一
 交機
 君山
 葉山
 如之
 百奇

つらむお別れの鐘を待たせり
くおたおとよと入とゆり船
葉蕨や柳の河をまきしり
常の舟の河をゆりしり
まをよもよの子年家
日歸りの室へ使やお舟を
大舟を下りて教をゆりしり
常にお舟を空へゆりしり
まをよもよの皮子羽を組
常におとよ船口よりゆりしり

柳糸
船
葉蕨
葉道
し河
舟羽
菊庄
泉之
羽格
芝明

きり九

まをよもよの身をまきしり
じり脚と空へ見りしり
常の道下りしり
常の時横つとゆりしり
明の夜の脚ゆりしり
西の月も葉をゆりしり
常の舟の河をゆりしり
まをよもよの舟をゆりしり
松原をゆりしり
待しとゆりしり

豊
大来
深矣
岷雪
古鶴
挿舟
関月
松谷
籟之
千程

猱之喚橋を色樹

今の世乃道乃也甘ふ柳うね 鳥路

立と曲ふ人の因子を甘ふさうか 朱帘

青柳や仕合吉乃馬の聲 紫雲

駕あてし兼ニ世の柳の毛 丹人

鳴るは作とる老師を創りし

向來亦く重くさるるもの女事いすふ

と下流のさびしきも驛の執友

四士と物し

ふ光をまひひ柳や海りうら 松露電 鳥明

甲二一

鳴る川澤玄居の詞 丁亥そ夏十有日

海ささ川の河原ささるる曲ひすきと

鳴るものしり百念坊やあいらぬれや

はぬる川をたのしむ羽翼とて後日

磨麻子あ蛇一と億兆の人と

入甲かく海目の磨きも出さるるあは

ルみのと樂法師あはるる

法師口を掩めく胡盧

屍をくち二 夜を

くく吹鳴く蜂

蓮見のちりき

相中園田邑洞秋子室
ル橋女うぬまを

牡丹を花の富貴なりとのちりき是を
愛する人のちりきハ縁ヲ建をまら
氣と志の隠造かふりのちりき
たをまらくを深骨のちりき
いりきくまを家のちりき
本情をいりきくまを蓮のちりき
ちりきくまをのちりき
ちりきくまをのちりき

蓮見くちりきくまをのちりき

甲二

猿虎

そとくちりき其迷いとばるるのちりき
蒼宮のちりきくまをのちりき
ちりきハ聲名後世に傳ふ曾我氏祐成り
ちりきハ後のちりきハ縁ありのちりき
ちりきハ家の男のちりきハ
ちりきハ女をいりきくまをのちりき
ちりきハ縁とゆくちりきハ

五
上毛園田の藩中心友春路士

降書一たらる

枕上

見るも色もあつたはなを
身もあつたはな眼鏡を捨て杖を退き例の
春もあつたはな一麻入を彼黄梁を飲め
辞れ秋故郷をぬきし向ふ花の
月の松崎をぬきし向ふ雲とあひて
あめもあつたはな尖頭家もむす
遠き八重の鹿の聲とゆき近き小糸呂後の
儀の浪いさよと流しし松風を清く来り

甲乙三

破窓を敷る草子沈む虫の音は
暗の井のこり澤の舌舌を伝へて
呼き更す鐘なき驛の表は
てら志きらる枕を歌目め
燈を視て一宵空く反側を
そよのうたう之嘆橋外と
そよ音やゆき出掛の馬の
そよ鞭の向ふたの箱根八里の
ゆき曉を世子まの
夜毎の待意する光

とき夜よ

長持唄成待明し

お江那の圓好ち田氏松記をより古案呂後の
唄の秋の松急と忠像す又行し
栄蔬ハ木ひひ出と海
あつて一葉からくちをさうあさ一の夜を
感も徳よりの若菜の耳さよるさき
夕夕の向る澤居の光の麻えハ
いりき卒子越さるし子杜選の一章と
属し浄書し たるを度あさるし

鴨川澤秋暮句

子序の儿をを新しき歩庭隅草四河の
必子獨坐みして庚士う原を係めやる
は内を松もあつ海をりしは松の
丘子攀の草し地石榻上り登縹し
大洋の澄澄子面すまハこりあさの儀より宮林ハ
床子床る消くは路のののハこのを淋し
志ハく目を縫しそ歩とうえととみ橋上
杖先としめハ皇山のる輪影斜り影り
こるこいせく遠かし旅人のまハゆけ

笠のこぼれきく卯酉の道平行ふきふと
駒すふも又きふ

夕暮の舟
たのしみ
澤の舟

お北総海上郡総浦の心期市石菴尋松子より
幽澤の夕らしきうらやまの同み哉 引平し
丁亥季秋天高き日盧陵の一句哉此
そと一休不遠思と子里に地す

又こまもるをいこし葉

乙府やかきひ俺、構、何み鴨立戻ハ財取る候
物産饒多き候も足る候とあまハなり
多鴨の并の志こま一節 日夜消くと鼓吹
るさしや屋、小実をこま路ハ崑崙の極下甘熟
かま川ハ彷彿と凝く音節の友とせしをるハ
捨のものを欲ををりし、いよくま川より味噌
がまはまみまきまの覗き甘熟 甘き酒まを替るの
来るも又未し春ら子里の遠何りきすのる乃
子といふこまもるよやく隈毎の風とる熟

細雪の耳よりきこえては
いづれも負ぬ旅のつらき
布子浅縹ひ
芦芽膝穿の指もさるめと
髪平しては
暁の
星を見むしする歌よ
お似るるん
空司百念坊向

如何是佛 云雷下ゆ筆

筆よりきこはし

負ぬ冬とくしゆ子

云南総東を古城下ぎ音松の友四時亭雨林叟
系、御冬の福よ之しきとあは常は懐ひこの
いづれもを報ひ枯槁耳足するゆゆしき
心ゆく送る

待雪

朝をくもぬまのちか
より脚もたふる人の心なり
雪人の筆もあはれ
詠めぬるよきその
お地ぬるや
秋を月も冬を雪を
誰うあまきその
深澤をけし
降たりしする膝六の神を
欺詠を

待をへる回中

多事松の路書

小翰を風字研子濡すに色中
小童千即居も且彼を推敲と定む
日心精辞綺也と賞もその詞と
暮齡のたのしきすまの

寒を佛を憐む

あま一跡にイミを雲をいふ
月の行也に如くゆのみと云
蓮葉踏もきてそと
雪を白舌垢もくく庚子橋を
秋もさくとも長清の墓をめく
都のものの縁あはれいさあすむ
そとあへる西の
雪人の雲よりあはれ
十餘年すまのあはれ

志んくく思きを

見まゝ、寒まゝ佛

親泥文

平生起れり日常称佛仏即用之

維歲丁亥、次子希子冬初之寔、まの夜
ハ、穀堂前百念坊、物葛をるるひさるる
眠る聲、空孤條の下、まをを喚び、山林の
口氣の

